

# 『新しい人よ眼ざめよ』

——絶望の時代に希望を見る——



## 本田和子

☆ ☆ ☆

——お父さん！お父さん！あなたはどこへ行くので  
すか？ああ、そんなに早く歩かないでください、話  
しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い  
子になってしまふでしょう——W・ブレイク「失  
なわれた少年」『無垢の歌』より

て父の姿を覆いかくし、泣きじやくる子どもの肩を冷く  
濡らしている。「おくれてきた人」である子どもは、置  
き去りにされる不安に常に脅えつつ、暗い夜をさまよい  
歩く宿命を、避け難く負わされているのだ。「子ども」  
に近付き、彼らについて何事かを語る行為は、先ずはこ  
の痛みの共有の上に成立すべきものに他なるまい。

大江健三郎著『新しい人よ眼ざめよ』と題されたこの  
作品集、父親と障害を持った息子との限りなく美しい共  
生を描いた物語群は、W・ブレイクの右の詩篇をモチー  
暗い夜の森で、子どもは露に濡れて泣いている。行方  
を見失った父親を求めて……。森の闇に、霧は濃く流れ

フとした一篇を冒頭に置いて、作品世界の幕を開けた。

そして、ブレイクの『無垢の歌』と『経験の歌』は、七つの連作を貫流する主旋律である。それは、私どもの心の奥深くに潜む「子どもへの想い」を不斷にかきたて、

共鳴し合い、それらを増幅させて、宇宙の極みまで無限

に鳴り響く聖なる楽の音へと、変貌させようと迫るのだ。作品集の冒頭を飾る一篇は、『無垢の歌、経験の歌』と題されて、まさしくブレイクの詩集そのものを表題に選び、ブレイクとの抜きさしならぬ深い結び付きを、鮮明に歌い上げていた。一八世紀英國ロマン派の一詩人、子どもの「無垢イメージ」の源流に位置するこの人こそ、いま、共に聖なる楽音を奏し合う、またとなき共演者なのだと……。

そして、最終篇『新しい人よ眼ざめよ』は、ブレイクの予言詩『ジエルサレム』中の、イエスとアルビオンと

の確信に満ちた美しい会話から、一節を引くことで結ばれている。

—— 恐れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前

は生きることができない。

しかし私が死ねば、私が再生する時はお前とともに  
にある——

重い障害を負った息子との、苦難に満ちた共生の歩みの中から、こうした再生の希望が導き出されたことで、作品世界は、とりあえずは一つの閥門を通過した。そして、二十才を迎えた障害児と、小柄な身体でさりげなく、しかもしっかりと兄を支えるその弟に、次代を託しつつ自身の老いへとまなざしを向ける父親、この三つのまんじの放つきよらかな残光に彩られつつ、作品世界の幕は壯厳に引かれるのである。

☆ ☆ ☆

一九八三年六月、第一刷刊行と同時に世評を賑わし、社会的に評価の高い賞の対象にもなったこの一冊の書物をめぐって、いまさらめいた言挙げをすることには、少

ながらぬためらいがある。しかし、「子ども」および、彼らと「共に生きること」の意味、そしてその栄光と悲惨を、こんなにまで美しく、かつ重く、歌い上げた作品の数はさほど多くはない。子どもの傍に身を置く者の立場から、いま一度、改めてみつめ直しておくことは、必ずしも無駄とのみは言い難いと思う。

著者である大江健三郎が、現実にも障害を持った長男を抱え、作品のあれこれが、この子息との深いかかわりの中から生み出されたものであることは、よく知られたところであろう。しかも、彼は、学生作家などと呼ばれたそもそもその最初から、子どもと縁の深いもの書きであった。たとえば、彼の初期の代表作『芽むしり仔撃ち』あるいは『飼育』など、いずれも少年の群れを主人公としていて、彼らに特有の神話的宇宙感覚に支えられた世界が、大江流の文体によつていきいきと再現されたものであった。戦禍の中で見捨てられ、孤立した少年の群れ、恰かも捨子集団のような彼らは、しかし、不思議な明るさと強さに満ちて、たくましく世界を体験する。高

橋英夫がその『大江健三郎論』において、「社会秩序からはみ出した劣性部分やアウトサイダーが、そうであるために却つて社会を逆転する力を帯びるといった衝撃がそこに生まれる」と、讃歎した所以である。

これらの作品において、少年は、単なる素材ではなかつた。川本三郎の評言を借りるなら、「大江は他者として弱者を描いているのではない。自己＝弱者を描いているだけなのだ。誤解を恐れずにいえば大江は、自身、ひとりの大きな幼児なのである。」「大江の作品はどんなに理知的で、どんなに最新の知の意匠をおびていようが、それらの理性は、幼児のコスモロジカルな感覚、身体感覚によって最終的には乗り越えられる。リアリズムのいじましい法則の彼方に、神話的と呼んでいい豊かな空間がひろがつてくる」のだ。彼は、自身の筆で作り出した子どもらと一体化し、彼らの痛みを、彼らと同じ肉体の痛みとして感じ、彼らの喜びに全身を熱くする。大江作品の力は、この作者自身の幼児的感覚に基因するものであり、その感覚によってキャッチされた宇宙的親和力に

由来すると言えよう。

そして、大江のこの感覚は、脳に障害を持つ息子と父の共生を語る作品において、まさにその真骨頂を發揮する。作品世界の父と息子が、お互いがお互いの分身であり、恰かも一対の双生児のようにすら見えるのは、その何よりの証である。

社会の片隅に追いやられ、役にも立たない厄介者として、息を殺して生きしていく未来しか与えられていない障害児……。このアウトサイダーたる彼らの痛みは、大江自身の肉体と魂の痛みであり、それに形を与えるべく彼の言語表現力はフル回転して作品世界を紡ぎ上げる。しかも、紡ぎ出される言葉の一つ一つが、すべて、この「常ならぬ者」である息子の存在に逆照射されて、深い色合いに染められていくのだ。

一例を引こう。父は、この息子のために、この世界の

なにもかもについて、「定義集」を作つてやりたいと考えている。父の死後、息子が生の道に踏み迷うことのないよう、世界、社会、人間についての完備した手引き

を、息子やその友人たちにもよく理解し得る言葉で書きつけておいてやらねばならない。このことは、実は、息子のためというよりも、ほかならぬ父親自身を洗い直しがつ、励ますための嘗為であつた。大江の文章は、この経緯を次のように語つて見せる。「僕はかつてひとつ夢想をいだいた。それを文章に書きもした。僕が死ぬ日、経験として僕のうちに蓄積されたところのすべてが、息子の無垢の心に向けて流れこむ。もしその夢想が実現することができれば、息子はすでにひとつかみの骨と灰になつた父親を地中に埋めた後、これから僕の書く定義集を読んでゆくだろう。むしろそのような、もとより子供じみた夢想にすがりつくようにして、自分の死後の現在における息子の受難についての、様ざまな思いから救助されることをもとめて、僕はこの定義集を書きはじめるかもしれないが……」

父は、先ず、憲法を出发点に置く定義集を作ろうと意図する。第二次大戦後の変動期に少年であった父親にとって、新しい憲法の出現は、めくるめく感動の体験であ

つた。あの少年時の昂揚を、この知力の発現を奪われた息子と共有するすべはないのか。こうした父親の切ない願望に対し、息子が確實に受けとった定義、それは、父親の「足」に関するものであった。彼は父の足を偏愛し、柔かな壊れものでもあるかのようにそれを撫でさすりながら、「善い足、善い足、本当に立派な足ですねえ」とつぶやく。そして、外国旅行から帰った父との関係の回復も、この「善い足」の確認を通路としてなされたのであった。

人間の肉体の中で最も中心部から遠い足、それに触れるなどを媒介に、足の持ち主を理解しようとする息子の世界把握を、父は苦しみながら己れのものとしていく。

「しかし僕はよくイーヨー（注、息子のあだ名）の心の働きをも見てとりえていたのだつたか？つまりはかれの心の働きの側に立つての定義でもありえていたか？」

と、己れに問い合わせながら……。

このとき、ブレイクの予言詩『ミルトン』の一節が、

一閃の啓示として彼に与えられる。すなわち、ミルトン

の靈は流星のように降つてブレイクに入る、しかも、その靈はブレイクの足骨から入りこんで核心にいたつたのだ。こうして、ミルトンの靈とブレイクの肉体が合体したとするなら、父親の足に対する息子の偏愛、そしてそれを経路とする両者のつながりの意味を、改めて把え返すべきではないか。「僕はこれまでイーヨーのために、事物や人間について定義することをめざしてきたが、いまは逆にイーヨーがブレイクの『ミルトン』の一節を、はつきりしたヴィジョンとして提示している。これは父親のためのイーヨーによる定義」に他ならないのだ。

☆ ☆ ☆

——「雨の木」のなかへ、「雨の木」をとおりぬけて、  
雨の木の彼方へ。すでにひとつに合体したものであ  
りながら、個としてもつとも自由であるわれわれが、  
帰還する……——

父親は、インドネシアのボゴール植物園を訪れて、

「雨の木」と呼ばれる名木を遠望したとき、何故か直視することを避けて踵を返したのだが、その旅の途上で、右の一篇の詩のようなものを書きとどめていた。莢状の葉の中に水滴を含みこんで、雨の上った翌日まで、その茂みから滴をしたたらせる「雨の木」。母性ながらの潤いとやさしさに満ちたその大樹の下で、父は、自分一人だけでそれを仰いではならないという、激しい想いに把えられたのだった。「雨の木」とそれに象徴される安らぎの世界へは、息子と共に歩み入ろう。

そして、彼は、ブレイクが最後の予言詩『ジエルサレム』に、自身でつけた彩飾版画を見ていくうち、そこに描き出された「生命の樹」と「雨の木」との不思議なまでの類似に魂をふるわせる。しかも、「生命の樹」に磔にされたイエスと若いアルビオンとの対話は、彼の上に静かな恩寵として降り注ぎ、よくわからぬながら、イエスの思想の核心をなす「罪のゆるし」へと歩を進めるよう、彼を励ましてくれたのであつた。

息子は理性の力に恵まれず、現実世界には何ほどの貢

献もなし得ないながら、魂の力だけはむしばまれることなく、その無垢を持ちこたえているではないか。そんな彼と一体化しつゝ、「生命の樹」へと歩み寄る。この生と死の過程が、無意味であるなどと誰に言い得よう。生産性という現実の価値の外に位置する息子との共生によって、父は、「罪のゆるし」「魂の自由」という別の次元の価値に導かれ、それが息子らと共有可能であるという確信によつて、再生の希望の中に老いを迎えるようとしている。

父は、ブレイクの詩句を借りて、「眼ざめよ、おお、新時代の若者らよ！」と呼びかけつつ、一つの幻を見ている。新しい時代、しかも、決してバラ色とは言い難い凶々しい核の時代に、凜然と額を上げて立つ息子らの健気な姿を……。このとき、私どももまた、この父のまなざしを借りつつ、暗い絶望の時代に、一条の希望を見ることになるのである。